
行き着いた先はデモンベインの世界だった.....

餡子入りパスタライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

行き着いた先はデモンベインの世界だった……

【Nコード】

N02380

【作者名】

餡子入りパスタライス

【あらすじ】

ほんと普通の事故で死んでしまった主人公。突然邪神アザトースが現れ、人外を軽く超えた力を手に入れてしまった。これは主人公最強チート転生物です。

第1話（前書き）

あまり長く続かないと思いますがよろしく願いします。

第1話

トラックに衝突、吹き飛ばす僕に周りの人達の視線は杭付け。

凄い……人生で一番輝いてます。

人生で最後に思ったことがこれとか、僕は最後まで普通だったなと思います。

意識が遠退いていって周りの人が騒がしいですが耳に入りません。

しかし最後にこれだけ聞こえました。

「トラックにぶつかるとかテンプレすぎwwwテラワロスwww」

早く死にたくなってきました。

鬱だ死のう……。

次に生きるとしたら人間以外が良いです。

人間の社会は私には辛すぎます。

幸い父母は私の事気にしないと思いますし、僕が居てもただ地球の資源を食い荒らすだけでしょ……。

じゃさようなら。

次あるとしたら……

目を覚ますと、白い空間が僕を覆っていいました。

「その無気力は人としてはまた珍しい」

その声は僕の頭に直接語りかけてきました。

「そんな君が力を持つたら、君はどう力を使うのかかちょっと興味が湧いてきたよ」

あの貴方は……

「ああ私が、そういえばまだ自己紹介してなかったね。我が名はアザトース。君も聞いたことあるだろ？」

いえ聞いたことはありません。

そんなに有名な方なんですか？

あ、すいません。

生意気な口効いて。

「いや、知ってたら知ってたで随分マニアックだと思うぞ」

そうなんですか？

「そうなんだよ。

さて本題だ、何故私が君をここに呼んだか分かるかな？」

分かりません……

「別に怒ってるわけじゃないんだからそんなに落ち込むことではないよ」

はい……

「フッフ……君は本当に私が求めていたような人物だね。いや実に愉快！」

僕愉快ですか……それは良かったです。

「ああすまんすまん。

話が脱線したな。とりあえず四の五の言わず転生しろ」

ああ輪廻ってやつですね。

「あんなと一緒にされたくないわ！

で何か要望あるかな？」

転生するなら人以外でお願いします。

「は？聞くが何故人間に転生するのが嫌なんだ？」

人間社会が嫌いだからです。

出来ればアリとかが良いですね。

何も考えなくていいし、すぐ死にますし、虫は痛覚無いつてききま
すし。

「……………うんやっぱ君は人間をやり直させた方が楽しそうだ」

え？

「ただの人っていうのもつまらないし、最強チートにするかな……………」

あの僕の要望は……………？

「まず能力を旧支配者クラスの魔人にして、それから私の眷属を使
役出来るようにもおこつ。」

後は精神操作を一切受け付けないようにしておこつ。」

君は心が弱いからな精神操作受けたらひとたまりもないだろ？」

……心遣い感謝します。

「で、要望はなにかあるかな？」

僕をアメーバにしてください……。

「じゃ、行ってこい」

また、意識が遠退いていきます。

結局最後まで要望聞いてもらえませんでした。

第2話

目を覚ますとそこには美人な女性が居ました。

ああ、これが転生ですか。

しかし、何故僕は記憶を引き継いでるのでしょうか？

「貴方の名前はカイト＝アハード。

元気に育ってね我が子よ」

そう言うと、たぶん僕の母であろうか方は、僕を抱きかかえて微笑みました。

やはり赤ちゃんですか僕は……。

僕も微笑みました。

というより笑顔になりました。

流石にまだ産まれたばかりの子が微笑みとか無理でしたね。

「フフフ、流石は赤ちゃんは可愛いわね」

ありがとうございます。

そう心の中で思っています『お母さん』

あれから五年経ちました。

流石は赤ちゃんの体でした。

すぐ寝てすぐ排尿。泣けてきました。母さんを困らせるといけないのでここはグツと我慢しました。

そして生後一年、父親を一度も見たことはありません。

しゃべれるようになったら聞いた方が良いでしょうか？

いえ、きっと深い事情があるのでしょうか。

僕は母さんが言うまで父さんの事は聞かないことにしました。

3歳になってやっと立てるようになりました。
母さんに字を教えて貰おうとしたら、母さんに凄く驚かれました。
3歳児が立っていきなり喋り始めてたら流石に驚きますよね……。
ようやく動けるようになったので、母さんの手伝いをしたいと言っ
たら笑いながら断られました。
どうやら母さんは発明家さんみたいです。

前世のような生活は嫌なので一生懸命勉強しようと思っ本を読んでいた
ら母さんに苦笑されました。

しかし、分かったことがありました。

母さんの書齋にある本は全部図鑑並みの厚さでした。

流石は子供、まだ体が出来上がっていないのか、頭上から降ってきた
本に直撃して気絶してしまいました。

その日は母さんにこっぴどく怒られました。

そして4才になり、機械いじりが趣味となりました。

母さんのおこぼれ部品を貰い組み立てていったら、なんかカンプラ
並みの物が出来ました。

母さんに見せたら「流石は私の子供!!」と喜んでくれました。

なんだか僕も嬉しくてたまりません。

前世の頃より役に立てて、さらにこんな母さんに巡り会えて、本当
に僕は産まれてきてよかったと思います。

そして次の日から母さんに「出来たら見せてね!」と言われたので

頑張っ て作っ てみることにしました。

一度母さんにこんな子供気味が悪くないかと聞いたら。

「なんで？ 才能あるっ てことは良いことじゃないの？」

こんな僕を受け入れてくれる母さんに、心の底から感謝しました。

5才になり、初めてこの世界に錬金術と魔術があることを知りました。

たまに部品から禍々しいものを感じると思っ たら、そういうことでしたか。

母さんは発明家であり錬金術師ということが分かりました。

興味本位なのですが、母さんに魔術を習いたいと言っ たら、難しい顔になったので辞めました。

母さんの仕事を横でニコニコ見ていると、母さんもニコニコな顔になっ て笑っ てくれるので、心が温まります。

そんな日々が続いたら良いな…… 僕は心の底から願いました。

とある日のことです。

母さんはこの日、仕事関係で近隣の街まで出かけに行くそうなので、僕も一緒に行くことになりました。

着いた先の光景に僕は驚きました。

視界いっぱい立ち並ぶビルに、どこからともなく聞こえてくる人の声。

やっぱり僕の住む場所が田舎ということが再認識できました。

母さんがちょっと待っててね、と言って何故か大きい図書館の方に向かって行きました。

母さん……5才児を一人にするとか信頼していると受け取っていいんですよね？

仕方ないので暇つぶしに、母さんからお小遣い程度に貰ったお金を使い遊びに行こうとしたら、懐から電子音が鳴りました。

これは携帯電話もどきで母さんとの連絡手段にと母さんと共同開発しました。

で、さつきから鳴り放しの携帯電話もどきのディスプレイを確認するよ。

なんか会議が長引きそうだから、どこかで遊んでいらっしやい
by 母より

……母さんからも許しが出たので遊びに生きたいと思います。

金を使わずとも、珍しい光景を見るだけで僕は満足しました。

「きゃっ……」

誰かが僕にぶつかってきました。

見ると長髪の黒い髪の子でした。

ついでに言つと僕の髪は黒なのですが、母の髪は金髪です。そして僕はなぜかの黒青のオッドアイ。

その子は僕と同じぐらいの年なのか分かりませんが、分かることが一つだけあります……。

「うっ……ぐずん……！」

僕が悪い訳じゃないのですが、目の前の子が滅茶苦茶泣き出しそ
うです。

「ごめんね……だから泣き止んでください」

そう言つて転んだ子を立ち上がらせると、僕は懐にあつた飴玉をそ
の子に差し出した。

「糖分が足りないから泣いちゃうんですよ、ですからこれでもなめ
て元気出してください」

「良いの……？」

ようやくその子は泣き止みました。

「はい」

そう僕が言つとその子は飴玉を受け取りました。

しかし……。

「うっ…… 飴玉出てこないよ……」

また泣き出しました。

飴玉が出せないとかどこのお嬢様なんでしょう。

そつえばこの子の着てる服、ドレスともとれる構造してますよね。

仕方ないので代わりに僕が飴玉を出してあげました。

「あ〜ん」

その子は口を開けました。

まるで子鳥が母鳥に餌を催促する行動に似ています。

つまり……。

「ぐずん……！うっ……」

また泣き始めました。

仕方ありません。

「ほらあ〜んしてください」

「あ〜ん」

飴玉をその子の口まで運んでいくと……指ごと食われました。

「そうかな……?」

うっー!!うっー!!

サイレントが町中に鳴り響いた。

『市民の皆様シェルターに避難してください。
『ブラックロッシ』の襲撃です!!』

第3話

「ブラックロッジ……！」

聞いたことありません。

確かマスターテリオンを頭首とした犯罪宗教団体でしたっけ？

数名ほど変な格好してサブマシンガンを連射している人がいますが、その人達は警備隊によって撃ち殺されました。

とりあえずここから避難した方がいいみたいです……。

「お父様お母様！」

瑠璃ちゃんはそれだけ言う就走って行ってしまいました。

きっと母さん父さんに会いに行っただけでしょう。

きっと探していた人達がどうにかすると思います。

僕も母さんのことが心配になりますが……。

懐から電子音が聞こえてきます。

中身を確認します。

私はもう駄目です……。

ブラックロッジに捕まり目の前で女の人々が犯されています。きっと私の末路も皆と同じく辿るでしょ。

カイトちゃん今までありがとう。

だからどうか逃げて！

この街にいては危ない。

カイトちゃんだけでも生きてください……。。

本当に産んで良かった、カイトちゃんのおかげで私は一人ではなく
なりました。

一人で逝くのは寂しいですが、こんな私を忘れてカイトちゃんは素
晴らしい人生を送ってください。

愛しい我が子よどうか生き延びてください。 b y 母より

母さん……！

身体中から力を感じる。

異質にして異物な存在。

魔人を象徴する多大な魔力。

眠りについていた力が激情に反応し、今ここに真の意味で魔人カイトは産まれた。

カイトはあの図書館に向かって走り出しました。

途中に居たブラックロτζの戦闘要員がカイトに向かって銃を撃つが、それは障害にならない。

カイトに届く前に不可視な壁によって銃弾は勢いをなくし、下に落ちていく。

戦闘要員は一瞬動揺したが、素早くカートリッジを切り替え対魔術師用の弾を装填した。

逃げ逃げ逃げ！！

走れ走れ走れ！！

駆ける駆ける駆ける！！

カイトは銃弾の雨の中を駆け走る。銃弾はリヒトの命を奪わんと迫り来る。不可視の壁を突破され銃弾が目の先までくるが、今度は翡翠の色をした防御陣によって防がれた。

「邪魔だっつ！！」

カイトが腕を振りかぶると、戦闘要員はまるで嵐の突風に吹かれたようにして、吹き飛んでいってしまった。

図書館に入ると中からは濃厚な血の臭いが館内を満たしていた。頭痛にも似た痛みがカイトを襲い、一瞬膝を崩しそうになるが足腰に力を入れ踏ん張り、館内を疾風の如く駆ける。

中にいた戦闘要員をことごとく凌駕し、カイトは母がいるであろう場所を目指し、突き進んでいく。

突き当たりにある開け放たれた扉から膨大な魔力を感じる。カイトに比べ大したことはないが、それでも人が持つには異常すぎる量だ。

中に入ると見渡す限りの赤の光景。窓から射しこむ陽射しが、その光景を更に生々しく見せていた。

「ああ？まだここにこんな餓鬼が居るなんてね、全く役に立たないわねあの戦闘要員」

そこには振り返り血を浴びていた道化師がいた。彼の顔は仮面で覆われ表情は確認できないが、彼からは濃厚な死の臭いを感じ取れる。

彼を見た瞬間カイトは激しい頭痛に頭を押さえ、突然頭に入ってきた情報に一瞬戸惑ったが自分には理解できた。

「【妖蛆の秘密】……」

カイトはつぶやく。

「あらあ、まさかこんな餓鬼が魔術師だったなんて意外ね。

それにこの【妖蛆の秘密】のこと知ってるなんてほんと面白い子」

ケラケラと笑いながら道化師は懐から一冊の本を取り出した。

蛆まみれで汚いが、本からはカイトが先程から感じていた魔力を発している。

「例え相手が高位の魔導書を持っていたとしても、僕は母さんを助けるため引けません！」

「ああああ、威勢だけは一人前ね。

でも残念、あなたの母親、さっき私が壊しちゃったわよ」

カイトは目を見開いた。道化師を見上げながら右拳を無意識の内に強く握りしめた。そして認めたくない現実と戦っていた。

崩れ落ちそうになる心を、道化師に対する怒りでどうにかつなぎ止めていた。

激しい怒りにより、カイトの魔力はさらなる覚醒を遂げた。

否！ 魔力ではない魔力ではない何かだ。カイトは神経を通じ、全身にみなぎるのを感じる。目を閉じ心を落ち着かせると、揺り駕籠に乗っている何かの存在を感じ取った。しだいに理解する。

「アザトース……」

カイトの体内から魔力がほとばしった。その威力は道化師の体の一部を削り取り、灰に変えた。

「なによこれ！！ 魔導書も持たない魔術師がこんな魔力を…有り得ないわよ！！」

道化師は怯み後ろに後退していくが、突然足が消えてなくなった。

「なによこれ！ いったい何なのよ！！」

突然なことにパニックになり、叫び出す。

カイトはゆっくりと前に進む。道化師はカイトから放たれた魔力にあてられ、悶え苦しんでいる。

そして、カイトは口元を引きつらせ、右腕を引き拳に魔術文字を刻み、渾身の一撃を道化師にお見舞した。

カイトの拳は道化師の仮面を粉々に砕いた。

「ぎっ、ぎゃアああっ！！」

拳は頭蓋骨にまで至り、カイトの拳に乗せられた魔力は道化師の体内に侵入し、神経をずたずたにしていく。

「痛い！痛い！！いたああアアイ！！！！」

肉体的ダメージ以外の痛みに、道化師は悲鳴にも似た叫びを上げた。

叫び声は館内に響き渡った。

「母さんを……母さんを返してよおおおおお!!」

カイトの叫びが木霊する。

母を失った悲しみと目の前にいる道化師に対する怒り。溢れんばかりの感情が頭を巡り、目には涙を貯め、泣き叫びながら道化師の体を殴り続ける。

やがて道化師の姿はミンチのような姿荷なり、腐敗していた肉からは凄まじい悪臭がする。

「あはは……」

攻撃を中断し、乾いた声をあげながらミンチになった道化師を生氣のない瞳で一瞥した。

「死なないですね……。さすがは機械仕掛けの神を内包する魔導書……不死能力が規格外すぎます」

拳に乗せた魔力を使って再生しづらいようにしたおかげか、中々再生が始まらない。

「不死ですか……死ねないといった点では可哀想ではありますが、それでも僕は貴方を許せない!」

魔法陣がまるで道化師を囲むようにして、次々と翡翠色の光を放ちながら魔法陣が現れる。

「旧支配級の魔人魔術に貴方はどこまで耐えられますか」

魂を犯す魂を侵す魂を冒す。並みの人間では発狂してすぐ死に至るが、道化師は魔術師だ、それも【妖蛆の秘密】を所持するほどの異常者。

「ガガガガガガッ!!!?」

声を発するまで回復したのか、道化師はじべたに這いずりながら奇声をあげた。

「今の僕では貴方を殺しきることが出来ません。残念です……母さんの敵を滅することができなくほんとうに残念です……。魔導書を壊すのが手っ取り早いのですが、魔導書自体は悪くありません。かと言って貴方を生かしてはおけないのも事実です。ですからその魂を封印させてもらいます」

大気が震え、邸内が揺れた。魔法陣が目を覆うばかりの輝きを……。

「っ!!!」

膨大な魔力を感じると共に魔法陣は崩壊を始めた。

旧支配にも並ぶ魔人が、油断があっても崩れないように作った魔法陣を誰かが壊したのだ。

「そやつを封印されると都合が悪い、汝が油断している隙について邪魔させてもらった」

いつの間にか道化師は姿が消え、変わりに人外じみた美しさを持つ少年が、穏やかな笑みを浮かべながら、カイトを値踏みするような視線を向けていた。

カイトに、またもや激しい頭痛が襲いかかり、強制的に情報が頭の中に入り込んだ。

「旧支配者の子供ですか!？」

異常すぎる魔力に、発せられる人とは思えないなにかをカイトは敏感に感じ取った。

少年は驚いたのか、微笑を曇らせ、鋭い目つきでカイトを睨む。常人ならば即失神するような恐怖を内包したものである。

カイトは一瞬動揺したが、アザトースの加護(?)のおかげか臆することなく睨み返す。

「千の永劫の中で我をヨグソトースの子と知っているとは…あやつだけかと思っていたのだが……。汝どうやってあやつ目を欺いた？」

少年の瞳に僅かながら光が宿った。

「それより、よくも封印を邪魔してくれましたね。あの【妖蛆の秘密】の所有者は僕の母の敵です。貴方が邪魔しなければ封印は完遂されていました」

「あやつは『アンチクロス』の内の一人でな、私情で封印されて戦力が減るのは困るので邪魔させてもらった」

「そうですか。なら僕も答えてあげますけど…あやつってナイアルラトホテップでいいんですよね？ マスターテリオン」

律儀に答えるカイトに少年…マスターテリオンは九の字になら狂ったように笑い続ける。

「あはっ、あははははははっ！ 我を笑い殺すつもりか？ 汝名前はなんだ？」

「僕の名前はカイト＝アハードです」

「そうか、カイトか……良い名だ」

「あ、どうも。で、理由ですけど、それはナイアルラホテップが僕の従者だからです」

一瞬の沈黙に空気が滞った錯覚をカイトは感じた。

「ナイアルラホテップの従者の間違いではないのか？」

マスターテリオンは聞き返してきた。

「ん〜、まああれです。僕はアザトースの化身に近い存在だからかと思えます」

「アザトースの化身とは……その歳で我の魔力を超えている理由がわかった」

マスターテリオンはカイトに手を差し伸べた。

「我と一緒に『C計画』を成就させないか？」

「お誘い自体は嬉しいのですが……此処に襲撃命令を出したのはマスターテリオン。貴方ですか？」

「私の命だ。霸道綱造が滞在していると聞いてな、我がティベリウスに抹殺を命じたのだ」

「そうですか……。なら僕と貴方は敵対関係です！」

カイトを中心に爆発的に魔力が収縮する。

「そうか……。出会いが悪くなければ良い関係を結べただろう」

マスターテリオンは残念そうにながらも金色の瞳をカイトに向け、微笑を浮かべている。

「もし僕が勝てたら、ブラックロッジの構成員を退却させてもらいませんか？」

「いいだろう」

二人を中心に魔力が集まり、暴風を撒き散らす。館内の床をえぐり、窓ガラスが割れ、所々に傷跡ができる。

力は互角……いや……魔力の総量をみればカイトの方が上だ。

魔力のぶつけあいをしていると、マスターテリオンが押し負けている。

僅かながら焦りの色を見せるマスターテリオン。だが細く笑いながら手元に魔導書を召喚する。

勝負は一瞬だった。なにもない空間から突然巨大な手が伸び、カイトを殴った。

二重防御陣を張るものの、その甲斐なく一瞬にして防御陣は粉々に砕け散った。

このままでは殺されると思ったカイトは、死ぬ気で巨大な拳を片手で受け止めた。

マスターテリオンは驚愕な顔をして、現実を直視した。そしてカイトはありったけの魔力を右拳に込め、巨大な拳を殴りつけた。

巨人の拳は罅が入り、粉々に砕け散った。

カイトは息絶え絶えの状態でマスターテリオンに言った。

「僕の勝ちです……」

マスターテリオンは、まさかデウスマキナが生身の拳で壊されるとは思っていなかった。

これまで生身でデウスマキナと真っ正面から戦って勝った者がいるだろうか。……普通は有り得ない……。

「約束は守ろう。ではなカイト」

マスターテリオンはカイトに背を向け立ち去っていく。

カイトは安堵すると、さっきまで張り詰めていた緊張の糸がほどけ、尻餅をついた。

こうしてこの街は、カイトの働きにより最小限の被害ですんだのだった。

しかし、図書館の惨状は悲惨なものであり、母の亡骸を見たカイトはその場で崩れ落ち、盛大に泣き出した。

第4話

母さんが死んだ。

僕は街で英雄の扱いを受けていたが、瑠璃ちゃんからの視線が痛かったです。

瑠璃ちゃんも僕と同じに両親を亡くしたらしいです。

貴方がもっと早く駆けつけていれば……と文句を言われました。

確かにもっと早く駆けつけていれば、僕の母さんも瑠璃ちゃんの両親も救えたかもしれません。

でもそれは過ぎてしまったことです。

瑠璃ちゃんはアーカムシティーに戻るこのことで、ベンツ車に乗って帰って行きました。

後になって気付きましたが、瑠璃ちゃんはあの有名な霸道財閥の跡取りだそうです。

ガチの金持ちでした。

あの霸道財閥に恨まれるとは……人生後先が真っ暗な気がします。

マスターテリオンと戦い、どうにか勝ちを拾いましたが、途中でデウスマキナを召喚するとか反則でしょ。

それにしても【ナコトの写本】ですか……。

戦っていてわかりましたが、僕はどうも人とはカテゴリーされない存在の能力を勝手を『理解』する力が備わっているみたいです。これも邪神の加護ですかね？

まあ、それのおかげで道化師の魔導書が【妖蛆の秘密】というのもわかりましたし、マスターテリオンが邪神の子供ということがわかりました。

かなりの規格外の存在だとは思いますが……僕はもつとチートなんですよね……。

でもかなりチートなんですけど、さすがにデウスマキナを生身で粉碎するのは骨が折れます。

実際折れました。

デウスマキナの拳を受けた左肩は関節が外れ、デウスマキナの拳を粉々にした右腕は指が完全に粉碎しました。

能力が覚醒した影響か、魔術が勝手に発動し、体を治してくれます。全治3分。

もう化け物と言われても仕方ないかもしれません。

意識的に回復を施せば全治に1秒も掛からないと思います。

そして僕は怨敵の道化師を倒すべく、世界を回り、情報を集めたいと思います。

でも出かける前に……母さんの遺品と死体を家に集め、家ごと燃やしました。

旅立つなら一緒の方が良い……。

数年間母さんと一緒に暮らしてきた家を見ながらそう思いました。

せめて母さんが一人でいても寂しくならないように。そう願いながら燃え上がる家を眺めていました。

それと同時に過去との決別をつけるためのものでもあった。ずるずると過去の出来事をずっと引きづらせるわけにはいかない。

過去を清算し、新しい僕を始めたいと……。でも道化師だけは許せない！

ウジウジ考えるのはやめた。でも母さんをあんな目に合わせた道化師だけは……っ！！

怨敵道化師を倒すまで過去の清算は完璧にはならない。

探し出して殺してやる。

自分にもこんな人に人を憎めるなんて知りませんでした。

燃え立つ我が家を背に、僕は歩き始める。長い旅路になるだろう……でも歩みを止めてはならない。今は先を見ることだけを……。

そして僕は旅にでた。

あれから12年の月日を得て、カイトニアハードはアーカムシティ
Iの地に足を踏み入れた。

どうも、ここいらでブラックロツジが暴れ回っている。その情報を聞きつけて現地に出向いてみれば……目の前にブラックロツジの構成員が、なんか変なボディースーツを着ている人に寄ってたかつて撃ち続けています。

なんかそのボディースーツを纏った人は、翼で銃弾を弾き無傷でした。白衣を着たギタリストらしき人がギターを構え、ボディースーツを着た人に向かってロケット弾を撃ちますが、ボディースーツを着た人がそのロケット弾を素手で受け止め、白衣を着た人に向かって投げ返してきました。

流星はあの【死霊秘法】がマスターに選ぶだけあるのでしょうか？
実に術式の組み方が滅茶苦茶です。

はつきり言ってド素人ですねあの人……。
でも、ネクロノミコンが契約するぐらいだし凄いなだね？

見てて危なっかしいところはあるけど、魔術師がたかがブラックロツジの構成員に負けることはないと思うので、少し傍観させていただきます。

ん？ロケット弾がバイクに着弾して、構成員と白衣の人それと女性の方が夜空の彼方に消えてしまった……。

ふむふむ。一度あのボディースーツの方と接触してみますか……。

「やつほー。元気ですか？」

ボディースーツの方の肩をよく見るとなんか小さい……ネクロノミコ

ンの精霊がただずんでいた。すごい顔で僕を凝視してきますが、警戒してるのでしょうか？

「だあ〜!! また変なのが現れた!!」

もう勘弁してくれよ……ネクロノミコンって魔力一緒に不幸も増幅させるのか!？」

「うつけ! なわけあるか!!」

それと汝はいつたい何者だ……?」

厳しい視線でネクロノミコンさんが聞いてきますが……どうしましよ……。

「まあまあ安心してください、僕はブラックロτζジと敵対する普通の魔術師ですよ」

「にしては汝から感じるソレは……本当に人間か?」

「あ、はい。ちゃんとした人間の子ですよ。ネクロノミコンさん」

うんうん、間違ったことは言っていない筈。ニッコリと微笑んだらそっぽを向かれました。

ねえねえ『これ』クレインゲームに突っ込んできていいかな?

人が親切にしてるのにつけあがりやがって!!

などと考えたら負けだなあ〜とと思っているので、とりあえず話を進めたいと思います。

「ネクロノミコンってあの?!」

ボディースーツを着た人が驚いています。って知らなかったんかい!

「我は魔導書【アル・アジフ】。汝も魔術をかじっていたのあれば、名前くらいは聞いたことはあるのではないか?」

「それもオリジナルじゃねーか」

「さよう。やはりしっておったか……だがその者は我を見た瞬間解っていたようだがな……」

意味ありげに僕を見るネクロノミコンさんの妖精……めんどいからアルさんでいいや。アルさんはじろじろと訝しむように見えます。

「え? そうなのか?」

「まあ……ネクロノミコンの精霊は銀髪という特徴ありますし、これだけの魔力を相手に授けられるのはネクロノミコンくらいかと思われています。まあ、相性もあるのでしょうか……」

「まあ、妾もこのようなところで術者と巡り会うとは思わなんだ。今後ともよろしく頼む大十字九郎よ」

ぴくりと九郎のこめかみが反応しました。

……まさか……。

「今、なんと?」

「汝、耳が遠いのか?」

九郎さん一度耳鼻科行ってみますか？

「今後ともって言ったのか？

って、どーという意味だ、おい」

「ん？そのままだと思っが？

妾と契約したということは、今後も妾と共に戦うということだ。我ら魔導書は術者なくして存在するのは難しいのでな。別行動というわけにはいくまいて」

なるほどアルさんははぐれ魔導書でしたか……。

「いや、だから勝手に決めんなよっ！

俺は承知したなんて一言も言ってねーだろうが！」

九郎さんはあれですか。

オレオレ詐欺にかかったようなもんですか？ 可哀想です。

「それに術者ならそいつが居るだろうが！」

九郎さんは僕を指差しながら言いました。

いや、嬉しいですね。ちょうどデウスマキナを出す魔導書が欲しかったですし。やっぱデウスマキナを出すほどのクラスの魔導書って中々ないですね。

「あやつはいけ好かぬ。

ならば問う。妾の力なしに、銃弾の雨霰をどう回避する？

もう汝は後戻り出来んのだ。既に妾と契約した者をブラックロッドが見逃すとも思っておったのか？

これも運命だと諦めるがいい」

「うっ！ 畜生！！」

九郎さん哀れ。

「アルさんはなんでブラックロッジに追われているんですか？
貴方がほどの魔導書ならデウスマキナで逃げ切ることも出来ますよ
ね？」

あ、魔力が足りないんですか？

それなら、魔力を少し分けてあげましょうか？」

「いらぬ！ 妾は他人から魔力を分けてもらうほど落ちぶれておらんわ！」

プライドが高いですね。ん？

「なにか聞こえぬか？」

「……いや、なにも」

なにかがこちら向かって移動してますね。

そして、前方に立つマンションが崩れ、そこからは……ドラム缶ロボの姿が……。

「うわはははは、見つけたぞ！」

ドラム缶ロボの拡張器から聞こえてきたのは、テンション上がりまくりの人の声だった。

ドラム缶ロボ……凄く弱そうです。

アルさんは呑気にしてますが、隣では九郎さんは大慌てでした。

『どうだ、恐れ入ったか。この超絶スーパー……』

右拳に魔力を集中……。

なんかめんどそうなので、すみません。

僕はドラム缶ロボまで跳躍。そのまま殴りつけた。

見事というべきか、ドラム缶ロボは完全に粉碎された。

デウスマキナでもない鉄屑なんて加減しても楽々だね

九郎さんとアルさんは、……有り得ない……といった顔をしています。

「いや、なんか五月蠅そうなので……お知り合いでしたか？」

「……いや、知らねー。あいつただの　　だ」

ああ、黄色い救急車のいる方でしたか。

「汝……魔導書もなしにあれほどの魔力公私を……いったい何者なのだ……！」

「ふっ、復讐者さ……」

間違ったこと言っていないですよ。
ほんとだよ。

『ふっはははははははは！』

あゝなんか嫌な予感……。

「やべえー、奴だヤツが来る！」

地面から、ドラム缶口ボがドリルらしき物を回転させながら地上に出てきました。

『ははははははっ！！流石に我が輩も死ぬかと思ったのである！』
ちよつて待てオイ！

あれからどうやって生き延びた！！

まあいいや……。

僕は再度魔力を拳に集中……すると同時に地面が崩れた。

「我が主逃げろ！」

そうアルさんが言いますが時すで遅し。

そのまま僕らは穴の中に落ちていった。

いやゝ飛べるんですけどね。こーいう穴に落ちるなんてそうそうないんで一緒に落ちさせてもらいました。

僕は見事に着地し、九郎さんは……見事でした……。痛そうです。

「魔術で保護したから、たいした怪我でもあるまいて」

九郎さんはなにか言いたいことありそうですが。

「とりあえず移動するか。えっ……」

「あ、まだ自己紹介まだでしたね。

僕の名前はカイトリアハードです」

「あ、俺の名前は大十字九郎だ。よろしくな」

自己紹介も終わり、トンネル構造の道を進むとそこには巨人がただずんでいました。

「ほう。この感じ。デウス・マキナか」

「デウス・マキナ？」

僕は……なっ!!!??

突然頭に『デモンベイン』の情報が入り込んだ。

そうか……大十字九郎は戦い続けていたのか……。

前操縦者『大十字九郎』【アル・アジフ】

なるほど……全ては運命道理か……。

いつの間にか九郎さんとアルさんはデモンベインに搭乗したようで、デモンベインからの稼働音が心地良く聞こえる。

そして突然消え去った。たぶん空間転移をしたんだと思います。

地上に出てみると、デモンベインが立ち尽くしていた。

何故動かないし……。

ドラム缶口ボから出現した砲身が全てデモンベインに向いていました。

次々と炸裂していきますがデモンベインには傷一つ付きません。

……凄くドつきたいです。

しばらく経ちますが未だ動く気配がありません。

カカシかカカシなのか!?

すると突然デモンベインから凄まじいエネルギーが感じ取れます。

「光射す世界に、汝ら暗黒、棲まう場所なし!」

断言された!

色々ショックです……。

「渴かず、餓えず、無に帰れ!」

ああ〜なんかそんな感じの現象化学でありましたね。思い出せそう
です……。

「レムリア・インパクトオオオツ!!!」

「昇華!」

そしてドラム缶ロボはまたもや跡形もなく、消え去りました。

第4話（後書き）

携帯電話で書くと文章が足りなくなってくる……

第5話

Side マスターテリオン

マスターテリオンは街を見下ろしていた。

アーカムシティの上空でデモンベインと破壊ロボの戦いの一部始終を見ていたマスターテリオンは、特になにも思わなかったが、デモンベインを見る瞳はまた別のものであった。

「やはり、今回もこうなったか……」

その瞳には希望や絶望が入り混じり、何度も同じ光景を見ている彼は疲れていた。

心は憔悴しているが、デモンベインの隣に居る少年を見て僅かながら笑みが零れる。

「いや、違うな今回は『やつ』が居たな」

上空では人は豆粒程の大きさでしかないが、マスターテリオンはしっかりと『やつ』の姿を瞳の中に映していた。

「カイトよ……運命を狂わせてみよ。

今回のヒーローは大十字九郎とは限らない。

さあ新たな舞台の幕開けをしようではないか!!」

マスターテリオンは街に背を向け姿を消した。

マスターテリオンは現在、夢幻心母の玉座に座っており、ドクター・ウエストの報告に耳をかたむける様子もなく、退屈そうにしているだけだった。

「つまりアル・アジフの回収に失敗した拳げ句、逃げ帰ってきたわけですな？」

アウグストウスは、ウエストを見下ろしていた。

「まったくもって情けない有様ですな。大天才の名が聞いて呆れますぞ」

「それは不意を突かれたからであって、我輩は負けたなどおもっていないのである」

不意打ちを食らったのは事実であり、誰が生身の人間が拳で破壊ロボを粉碎すると思っただろうか。

「ほう。ご自慢の破壊ロボは魔術師の拳を受けた程度で壊れるものだったと？」

更に、素性も知れないロボットに歯が立たないとは笑い話だな？」

「貴様ア、言わせておけば、ぬけぬけとっ！」

ウエストの怒りが限界を突破するが、ウエストは顔を赤くするだけで特に行動は起こしていなかった。ウエストも自分の勝てる見込みがない、ということをしつかりと理解していたので頭の中でストレスを発散させていた。

「やめろ、二人とも。気が滅入る」

マスターテリオンの一言で場は収まった。

「余は貴公を咎めるつもりはない。あのロボットがどのような理論で造られているかは知らぬが、破壊ロボットとは違う理論に基づいているのであろう。遅れをとるのも無理からぬこと。それにアル・アジフの契約者ではない魔術師の方の潜在能力は、余のリベル・レギスの腕を生身の姿のまま殴って葬ったほどだ」

「「なっ！！！」」
衝撃の事実にはウエストもアウグストウスも口をあんぐりと開けている。

あのマスターテリオンの生身相手にリベル・レギスを使ったことに、二人は内心驚きを隠せなかった。更にマスターテリオンのデウスマキナであるリベル・レギスを破壊したという事実をマスターテリオンの本人からの口から聞き、二人は戦慄した。

「何故そんな出鱈目のやつがここに居るのであるか！？」

「さすがの余もそこまで知らぬ」

ピシヤリと言われてウエストは口を閉ざした。

「しかし、あのロボットは霸道財閥の物の筈！」

「その通り、あれは霸道が造りし鬼械神・デモンベインさ」

突然現れた妖艶な笑みを浮かべる女性に、アウグストウスは魔導書

【金枝篇】を手元に召喚した。

「よい、アウグストウス。古い友人だ」

マスターテリオンはアウグストウスにそういうと、渋々といった感じにアウグストウスは【金枝篇】を手元から消した。

「今回はなんと名乗っておる？」

「今回はナイアって名乗ってるよ」

「なんとも捻りのない名前だな」

「次があつたら……いやゲームはもう終りかな？」

あの方の気まぐれで来たあの少年、何気に私の上司に当たるんだよね……なんで人間なんかが上司なるんだろ……あの方の考えが僕には分からないよ」

「そうであつたな。カイトはアザトースの加護を一身に受けたアザトースの化身的存在であつたな」

「裏から操ってあげようと思ったのに、精神操作できないんだよ。表面すら見えないなんて生まれてこのかた初めてだった」

「一度は接触したか」

「まあね。けどあつちから私に連絡は未だないんだよね。そこで僕は思ったんだ。少年に『能力』があつても『知識』がないってことにね。だから、私の存在も知らないんじゃないのかって。しかし、あの方にも困ったもんだよ、常にプー太郎だし、起きたかと思つたら厄介ごとしか起こさない……でね……」

ウエストには理解出来ない会話だったが、アウグストウスはアザトースという単語を聞いた瞬間、顔が変わっていた。そして、途中から現れた者はさつきからマスターテリオン相手に、愚痴をひたすらこぼしている。張り詰めていた空気がさつきと比べ緩んでいる。

「で？ 愚痴を零しにきたわけではなかるう？ 何用で来たのだ？」

「おっとつと。僕としたことが、肝心なことを忘れてしまうところだったよ」

やっと本題に入ったようだ。長々と愚痴を零していたナイアは、ははははっ。と笑いながらマスターテリオンに向き直った。

「アル・アジフと、デモンベインの搭乗者について、知りたくはないかい？」

「…………ツ！」

反応したのはマスターテリオンでもアウグストウスでもなく、ウエストだけであった。アウグストウスはさつきボツボツと「アザトースの化身だと…………だがしかし…………だがしかし…………」と思考の中でループを繰り返していた。戻ってこいアウグストウス！！

「大十字九郎。うだつの上がない、三流ロリ…………探偵さ」

「探偵？ ミスカトニツクの魔術師ではないのか？」

「あのアル・アジフが選んだのだから、間違いないと思うけどね」

「ふむ。してカイトについてはなにか知らないのか？」

「僕から積極的に関わるとね……」

カイトに見つかるのが嫌なのかナイアは頬をポリポリかきながらそっぽを向いた。

「アウグストウス、留守を頼む」

突然のことに、アウグストウスはほうけた表情をする。

「大導師殿、自らご出陣で？」

ニヤニヤしながらのナイアの口調に対し、マスターテリオンは薄く笑った。

「なに、余とて遊びに興じなくなる時もある」

「あ、カイト様に会ったら私のことは伝えないでくれ」

ナイアが最後にマスターテリオンにそう言うと同時に、その姿をかき消した。

第6話

Side カイト

デモンベインの後をついて行ったら格納庫に到着した。そこには腰に手をあて仁王立ちするお嬢さんと、その斜め後ろに鎮座しているボディーガード的存在を確認した。

(あれ？ あの子どっかで見た気がするけど……誰でしたっけ？)
出てきそうではない。

とりあえず様子見ということで、気配を消ながら眺めようと思いません。

「さて、大十字さん、説明していただきましょうか？」

「も、もちろん」

微妙にアルさんがこっちを睨んでる気がしますけど……ダイジョウブだよな？

「納得のいく説明がなかった場合は、解ってますわね？」

お嬢さんは口にはしなかったが、黒いオーラのものにあてられて、九郎さんは失神寸前であった。

「何から説明したらいいのやら……」

九郎さんは隣に立つアルさん……未だにこちらの方を睨んでいるアルさんへ目を向けた。

「汝、何時までそうやって隠れているつもりだ。姿を現せ！」

アルさんの声が格納庫に響き渡った。

ばれてるなら仕方ない。大人しく僕は隠蔽魔術を消して、姿を表した。

「「なっ！！」」

突然現れたことにより九郎さんとお嬢さんが驚いていますが、ボディーガード的存在の方は即座に姿を消したかと思っただら目の前に拳を突き出してきました。

速い……ですが！

僕はスレスレのところを回避しようと避けますが……悲しくも直撃を受けました。……ちよつと痛い……。

「ッ！」

ボディーガード的存在……便宜上、執事さんで。執事さんは殴った方の拳を押さえはじめ、清々しいまでの顔から冷汗が出ています。

「ウインフィールドどうしたのですか?!」

「瑠璃お嬢様不覚ながら、右拳の骨が砕けてしまい、使えなくなっ

てしまいました……」

この肉体ヤバすぎる……！

……って、瑠璃お嬢様ってあの昔会ったあの霸道瑠璃ちゃんですか……。

瑠璃ちゃんはこちらを睨んできますが、先程会った九郎さんは困り果てているようで、微妙に涙目になっていました。アルさんは瑠璃ちゃんと同じ睨んできますが、こっちは警戒している感じて睨んできています。

「久しぶりだね瑠璃ちゃん……」

そう僕は言うと片目のカラーコンタクトを外し、オッドアイの瞳になった。

「貴方はあのかの……！ ブラックロッジに入隊されたんですか！？」

僕は微笑みながら、

「怒るよ？ っていうのは冗談で、九郎さんとこの街を助けたただの魔術師ですよ。ウィンフィールドさん？ ちよっとすみません」

僕はウィンフィールドさんの近くにいき、さっき不能となった拳に治癒魔術を施しました。

「！ 治ってます」

ウィンフィールドは驚きの表情で己の拳を眺め、突然フットワークをやり始めました。

「何故でしょう……以前よりもなにか強い力を感じます……」

僕の魔術は治癒を通り越して、強化に至ったようです。さっきからウィンフィールドさんの拳から、魔力的ななにかを感じ取れるのは強化が原因だと思います。アルさんは微妙に難しい顔しています。

「さっきのご無礼。誠にすみませんでした」

そうウィンフィールドは僕に向き直り、頭を下げた。

「いやいや、こっちこそ怪しいこととしてごめんなさい。それと……瑠璃ちゃん……あの時は僕に力がなくてごめん。じゃ帰りますね」
もう会うことはないと思います。

「待ってくださいまし!」

その瑠璃ちゃんの言葉で歩みを止めました。

「私こそ……ごめんなさい」

瑠璃ちゃんから謝罪の言葉が聞こえただけでも、なんだが心が爽やかになってきました。

「ありがとう」

そう言って格納庫から僕は姿を消した。

言いづらい。非常に言いづらい。

この場で、「と言うわけで、御依頼の魔導書です」と言ってみる。間違いなく周りからKYな扱いを受けるだろう。だからひじょーに言いづらい。

「そういえば大十字様。魔導書はいかなされましたか？」

救い主はウィンフィールドさんだった。

「これです」

そう言っつて俺はアル・アジフ【死霊秘法】を指差した。

「ちょっと生意気なところありますが、意外に使える凄いヤツです」

俺は一本、前に進み出てアルの背中を押した。

「にゃ、にゃにをする」

「どござ」

俺はアルを霸道瑠璃に差し出した。

「……色々あつて今日は疲れましたが……わたくし、馬鹿にされて
いるのかしら？」

俺は姫さんの顔はにこやかな笑みを浮かべているが、その反面般若的なものが見えたのは気のせいではないと思う。

「いや、あの……。実はこれ、こう見えても魔導書だったりするんですけど……。信じます？」

「まあ、大変。大十字さんは先の戦いで頭を打たれたみたい。ウィンフィールド、救護班を」

まあ、普通の反応だよな。

「いや、だからですね、これは魔導書で……」

「ウィンフィールド、救護班はまだかしら？」

「ええい、小娘、いいかげんにせんか！」

アルは堪忍袋の緒が切れたのか、大声をあげた。

「こちらが下手に出ておれば生意気な。人間の小娘よ、とくと見よ」
「！」

アルの半身が魔導書のページとなって捲れていく。

「妾はアル・アジフ。アブドウル・アルハザードにより記された世界最強の魔導書なり！」

すんごく誇らしげな顔してるけど、体半分が宙に舞ってるから軽くホラーだぞ。

「どうだ小娘、恐れ入ったか？ ん？」

ページが戻りアルは人の姿に戻った。

「たかが十数年しか生きておらぬ小娘に大人気ないと思うが、やむを得ない。だが、これで小娘にも理解できたであろう。妾がいかに偉大であり、汝がいかに矮小化な存在であるかを！」

「でも、流石の世界最強の魔導書も『あの』カイトさんには勝てないと思いますけど？」

姫様から聞こえた微妙に皮肉めいた言葉に、アルは顔を真っ赤にしていた。

「ふん！ あやつ程度なら妾と九郎が組めば赤子のよつにたやすい！」

「巻き込まれ確定なのね、俺！」

泣きたくなってきた。

「つまり、貴方達はマスターテリオン相手に『生身』で勝てる。そうおっしゃりたいのですね」

「「なつー!!」「」

アルはもちろん俺も驚いていた。

「馬鹿を言うな！ マスターテリオンはデウス・マキナを所持しておるのだ！ デウス・マキナにはデウス・マキナで……たかが人の

身で機械仕掛けの神に敵うわけあるか！」

「でも彼は勝ちました……『生身』で『デウス・マキナ』に……」

確かにカイトのやつ、破壊ロボを素手で粉々に粉碎してたよな……。

「そんな非常識な……！」

魔導書が言う台詞か！？

「でも、事実です。まず事実を受け止めてから話しましょ。ウィンフィールド、『あの』監視カメラの映像データを」

「了解しました」

そう執事さんがいうと、しばらくしてカセットテープを持ってきた。

「いらんください」

そう執事さんが言うとカセットテープを入れたデッキが動き始め、5才ほどの少年と導化師が対峙しているところが映し出された。

「これは今から約15年ほど昔の映像で、奇跡的にも生きていた監視カメラから検出されたものです」

この映像から見るに、なにか二人が喋っているようだが音声が無かった。画面越しに見ていたが、あの導化師からは有り得ないほどの狂気を感じた。

そして、突然導化師の足の部分が消え、いきなり少年が跳び、素手で導化師の仮面を破壊した。音声はなかったが、導化師は苦悶の叫

びをあげていることが何故か解った。

そこからは蹂躪。少年はひたすら導化師を殴り、『壊して』いくが、相手は死なない。

少年は魔法陣を刻み、なにかしようとしたのだろうが、何者かに邪魔された。

「マスターテリオン……！」

アルはそう呟いた。そこには金の髪に金の瞳、目を奪われるほどの美しい容姿であった。

何度か会話を交わした。二人は魔力のぶつけ合いを始め、少年がマスターテリオン相手に、純粋な魔力のぶつけ合いで勝っていることに、アルは目茶苦茶噴いていた。しだいにマスターテリオンは押され、手元に魔導書を召喚し、空間から巨大な『拳』が、少年目掛け突き出され少年は跡形もなく消えると思われたが、有り得ないことに巨大な『拳』を『生身』で受け止め、殴り返して逆に破壊した。

「有り得ない……有り得ない……」

アルは現実逃避していた。

そして、少年はその場で気絶してしまったにも関わらず、マスターテリオンは殺さず、むしろ微笑を浮かべその場から去り、ブラックロッジの構成員と共に撤退していった。

「これが15年前に起きた事件で、この事件のさいに瑠璃お嬢様は肉親を失いました」

瑠璃は拳に力を入れ、怒りに表情が酷いことになっていた。

「そしてこの少年。カイト＝アハードは、その後どこかに旅に出てしまふ所在が掴めなかつたそうです」

「カイトって…さっきまで俺達に協力してくれたカイトか?!」

「はい」

なら俺達いらなくね？ あんだけ強いんだから一人でも大丈夫だろ？ それにメタトロンも居るし……。

「九郎……我が主。なに阿保なこと考えておる。妾は魔を刈る刃。魔を刈らずしてなにが存在意義だ……。確かに奴らは強い……。だが九郎は九郎のやることがある。成すことがある。自ら刃を翳さぬ者はいずれ死ぬ……。存在意義がないからな……」

その言葉で俺の心は何故か痛みだした。

「他人任せとは……腐ってる、錆びておるわ！ 九郎貴様は力があるのに使おうとしない。有るのに完全に他人に押し付けて、自らは安全な場所を籠る。九郎はそれでいいのか？」

「糞！ 後味わりー！ さっきの言葉は帳消しだ！ アルやるならとことんやるぞ！」

「応……」

こうして二人の絆は堅く結ばれたのであった。

第7話

「アーカムシティにも、デウスマキナを召喚できる魔導書はないというのですか！ 無念です……」

街の中をちよくちよく歩いて書店の中の本を物色しましたが、残念ながら魔力を帯びた魔導書はありませんでした。

何故こんなことをしてるかといいますと、九郎さんが言いました。

「何処かは忘れちまったが、ナイアさんが店長やってる古本書店に
なら魔導書が山ほどあったぞ」

そう聞いたので、僕はそのナイアさんがやっている書店を探すため、歩いて書店を周りましたが……そんな魔導書を扱っている凄い書店はアーカムシティ全域を風漬しに探しましたが見つかりませんでした。

「魔導書欲しいな……」

過去に、色々な遺跡を見つけては足を踏み入れましたが、魔導書らしきものは見当たらず、代わりに怪異達が僕を迎えてくれました。その怪異達の大半は、人間に手を加えたような不完全な化け物だったのためか、僕なんかを恐れず襲い掛かってきました。

普通の邪神の眷属ならば、僕存在を本能で感じとり、逃げ出します。

「……ッ！ ……この魔力はマスターテリオン……！」

どこからか懐かしい魔力を感じ取った。……マスターテリオンがどこかで戦っているということなんだと思います。それと同時に【死霊秘法】の魔力も感じとれました。

「辿ってみますかね……」

辿っていくと教会らしき所に着きました。

「ライカお姉ちゃああああんつつつ!!」

子供の悲鳴が教会内から聞こえる。カイトは迷うことなく教会の中へ突入する。中には子供が3人、女性が1人、更にマギスタイルになっている九郎さんを見つけた。

「カイト!! なんでここに居るんだよ!？」

「説明は後でします!! 九郎さんはその人達を安全なところまで運んでください!」

「け、けどよ……!」

九郎さんは口ごもった。大事な人を傷付けられ黙ってなどいられないのだ。

「いい加減にせんか九郎! 今の我らでは残念ながらマスターテリオン勝てぬ……これが今の我らの限界なのだ!」

マギスタイルの影響で、小さくなっているアルは九郎の肩に乗っていた。九郎はアルの言葉に歯を食いしばっている。九郎は、悩みに悩んで出した結果として、ライカをおぶり子供を連れて教会から離

れていった。

「お久しぶりですね……マスターテリオン。ブラックロツジの大導師本人が、いつの間に関人に『直接』手を出すまで墮ちたんですか？」

「久しぶりだなカイト。余は、デモンベインの搭乗者に挨拶に来ただけなのだがな。ムーンチャイルドの小娘が余の邪魔をしたゆえ排除したまでのこと。余の邪魔をするのであれば……カイト……貴公を討ち滅ぼす」

マスターテリオンの瞳には、カイトを討ち滅ぼさんとする意思が籠められており、それに応えんと魔力はマスターテリオンを中心に集まる。その高密度の魔力の影響なのか、床に輝が入り、ミシミシと嫌な音がカイトの耳に入る。

「とりあえず外に出ませんか……？」

このまま殺り合う場合、确实と行っていいほど周りに被害が及ぶ。教会内でやれば教会はカイトとマスターテリオンの戦いの余波で壊され、孤児達の家は見るも無残な姿になることだろう。カイトは、まさかマスターテリオンが教会の中で戦かおうとしていることに多少ながら焦りがあった。だからこそ、マスターテリオンに外に出るように提案を言った。

「……………」

マスターテリオンは無言で外に出て行った。

マスターテリオンって……微妙に素直。このときカイトは心の中でそう思った。

「余は今回本気でいかせてもらおう。紹介しよう。我が魔導書『ナコト写本』だ」

マスターテリオンの隣には、黒く暗い瞳を持つ一人の少女が従っていた。少女はマスターテリオンの側に寄り添うと、マスターテリオンは少女の髪を優しく撫で、少女は気持ち良さそうに目を細めた。刹那。カイトからは有り得ない程の『力』が身体から流出した。

「彼女持ちは良いですね……死ねばいいのに……。見せ付けるとは余裕ですね……。死ねばいいのに……。紹介しようとか……。マジで死ねばいいのに……。魔導書の妖精可愛いな！！コンチクショ！！……リア充など滅んでしまえ！！」

カイトは叫びはアーカムシティ全域に響き渡りそうになるが、そこは理性のある人間。既に防音の結界を張ってあるためアーカムシティに響き渡ることなく、色々と問題はなかった。

「はっ！ 僕はいつたい……」

さつきまでの行いを振り返り、突然カイトは黄昏れ始めた。

「隙だらけだ。余からまいるぞ」

言うが早い、マスターテリオンは空間を蹴ってカイトに肉追した。そしてカイト目がけて拳を叩き込む。

「『風』」

カイトは黄昏れ状態をやめた。カイトが言うと、右腕をかざした。

マスターテリオンの拳は見えない壁にぶつかったかのようにして停止した。

「ハスターの力か!？」

「いえ、ただ風を操っているだけなんですけど……。ハスターはどつちかと言うと太陽風なのでは？」

カイトは風を操っていると言うがそれは違う。カイトの操っているものは空間そのものであり、大四属性である風ではない。カイト本人は気づいていないが、術式に直接触れて、カイトの術式をデスペルしようとしているマスターテリオンには理解出来る。これは、長年の間魔術に触れ、『知識』があるが故にカイトとマスターテリオンではこの術式に関して解釈が違うから起こることである。

「エセルドレーダ」

「イエス。マイ・マスター。……アブラハダブラ」

エセルドレーダが告げた途端、リベル・レギスの腕がカイトに迫りくる。カイトを守っていた風は、紙のように薄い層で構成されていたせいか、リベル・レギスを抑止するには力不足であった。

「どんなに魔術師として鍛えても……デウス・マキナ相手じゃ意味ないか……やっぱ最後は力押しに頼るしかないみたいです」

カイトはギリギリのところであり、リベル・レギスの攻撃を避け、地面を蹴った。カイトの速度はまさに雷。人では認識出来ないような速度でマスターテリオンに近付き、拳を振り下ろすが、空間より現れたもうひとつの『腕』により阻止された。

「そのまま『壊す』」

突如、翡翠色をした無数の魔術文字が、カイトを覆う。それと同時に魔術文字から溢れ出る魔力が突風を起こし、辺り一面を覆う。

「これがとっておき！ デウス・マキナをブチ破る！」

カイトの拳を受け止めていたリベル・レギスの腕は粉々に粉碎された。リベル・レギスの腕の破片は光の粒子となり、空中で魔力として還元された。

と思っただら……。

「デウス・マキナ参考データとして、この粒子回収させてもらいます！」

空中で、本来魔力として還元される筈の粒子は、カイトの懐から出てきた魔術文字がビッシリと書かれている『瓶』により回収された。

「デウス・マキナを出せる魔導書がないなら、自分の手で造ればよかったですよね。その研究のためこの粒子はちよっとデウス・マキナの構造を把握するため頂いていきます」

カイトはリベル・レギスから出てきた粒子を大事そうに懐にしまった。

そのやり取りの間にナコト写本はリベル・レギスの腕の修復を終えた。そして、今度は容赦しないようでリベル・レギスの全貌が空間より現れた。マスターテリオンとナコト写本の姿はなく、ただその

巨大な存在がカイトの前に立ちはだかる。

『いくら汝でも生身でレベル・レギスを破壊することは困難。余のレベル・レギスの腕を破壊出来ることは賞賛に値するが、『全部』は無理である』』

「いやいや、そっちこそ的が小さくて当てられないんじゃないんですか？」

ズン！！

その瞬間、カイトの顔が少し曇った。まるで身体が何十倍も重くなり、重力に押し潰されそうになる。

「まさかの全域重力制御ですか……………」

『貴公も流石に……………』

「でも、それほどでもないですね」

パーン！！

カイトが、腕を振るうと全域を覆っていたマスターテリオンの重力制御は消え、身体の内自由を取り戻していた。

『ふふふつ……………ははははははははっつっ！！ 流石はアザートスの化身。余の魔術を受けてなお余裕とは……………貴公の存在が余は恐ろしい』』

マスターテリオンの重力制御の魔術にカイトは干渉し、打ち消した。

カイトはマスターテリオンが撃ってくる重力弾腰を避けながら、巻き付けてある紅一色のリボルバーを引き抜いた。圧倒的な魔力を放つ『ソレ』は周りの空気を淀らせて、『ソレ』の周辺はまるで異界、拳銃のような形をしているが、その存在自体が異常なオーラを放っていた。

「あまり得意じゃないんですけど……これだけのデカければ一発ぐらい当たるはず！」

リボルバーの照準をリベル・レギスに向け3連射弾。一発目はリベル・レギスの胴体を撃ち抜き、二発目は顔に掠り、顔の表面装甲を吹き飛ばした。三発目は空に向かって一直線。ハズレも外れ、それも大ハズレの。

『余の……それもリベル・レギスの張った防御陣をこつも易々と……本当にカイトは規格外だな。それに、その玩具からは紛々しい魔力が感じられるな』

「構造物質の約九割は僕の身体の『皮』から出来たものですから、ヤバ気な物とは解ってましたが……意外に解らないものですね。波長が同じだからでしょうか？」

カイトは、マスターテリオンにそう疑問を投げかけるが、マスターテリオンは無反応。リベル・レギスは損傷場所を自己修復し始め、みるみるうちに元の姿を取り戻していく。

『確かにその玩具……威力は目を見張るものがあるが、貴公は操りきれてないようだな』

「まだ、『皮』が定着しきってないだけですよ。いづれ当てられる

よようになるから問題無いです」

『しかし、これではいつまで経っても終わらない。次で決めようぞ』

「まあ、このまま被害が広がるのはかんばしくありませんし……。むしろ願ったり叶ったりですね」

『いくぞ』

「まいります！」

刹那、この世界から『音』と『色』が失われ、魔術が飛び交う世界が終りを告げた。

空間は歪み、人では存在できないような奇怪な世界が出来上がった。人が入れれば死ぬまで狂い、自己すら消失する。二人は純人間でないに加え、ある一定の『神気』を持っているため正気を失わずにいられる。例として、マスターテリオンに保護されている『ナコト写本』は、今にも狂いそうになるほどである。

気味が悪いモノクロの世界……。いや、『色』すらないから認識不能。ただ存在する『色』は三人と一体の機神のみ。

『ここは……。ヨグソトースとはまた違う次元のようだな』

マスターテリオンは、少し意外そうな顔をするが、意識は次の一撃に傾いている。

「僕の魔術ですよ。一種の固有結界なんです……。まだ完全に出て

上がってないんで、こんな歪んだ世界が構築されました。でも、世界から隔離するには十分かと」

つまり『固有結界』が出来る魔力と、世界を構築するだけの力はあるが、肝心の『イメージ』があやふやなのだ。こんななにもない世界が出来上がってしまったのは。

形のない世界は人を狂わせる。『無』の世界を、どのようにして認知してよいのか、人には理解出来ないから……解らないから……脳が沸騰する前に……人は、狂うしか道は残されていない。

「本気でやると被害が酷いことになるので……ね？」

だが、その問いに応える者はいない。

カイトは、リベル・レギスに銃を構え直した。銃の周りには翡翠色の魔法陣が浮かび、魔術的な補助を受けた。銃口の先には翡翠色な魔力が収縮をし始め、膨れはじめ。

しかし、その光景をずっと見ているほどマスターテリオンはお人よしではない。

『ハイパーボリア・ゼロドライブ！』

「『深紅』誓約第一解除。カトウグア神獣形態！」

銃口から放たれたのは一匹の獣。

そして、世界は熱で包まれた。

『クトウグアが何故!?!』

驚愕するマスターテリオン。

「クトウグアじゃないです。カトウグアです。カトウグアはクトウグア本体の一部……『子供』です」

リベル・レギスは、カトウグアの光に飲まれこの世界から姿を消した。

第8話

僕は、固有結界を解除し、元の時元に戻ってきています。手元の深紅を見ると、本来なら活発に動いている筈の『コア』が動きを停止させ、あのおぞましいまでの魔力の流出を止めている。

「誓約解除は、やっぱり深紅本体にもカトウグアにも負担を掛けますね。最初はちゃんとした銃だったのに……いつからこんな生体兵器になったんでしょ？ 不思議ですね」

僕が、最初に手にした時はまだ『普通』でした。僕が、カトウグアを見つけたのは古き者の遺跡のできごと、試験管らしい物の中にガツチリと固定され、クリスタル状の何かが収まっていたのを調べたところ、クトウグア本体の一部ということが判明して、驚きに驚きました。この一部は完全にクトウグア本体からのものであるが、一つの生命体として完全に自立していた。子供の立ち位置と同じといえる。

周りに、コレの手掛かりになるものがないか調べましたが……情報端末が一切なく、それ以上のことは分かりませんでした。

それ以外にあった遺跡の収穫といえばとくになく、最初の方で見つけたデウス・マキナを呼び出せる魔導書よりも希少なものが手に入った。ということぐらいです。

まあ、過去にそんなことがあったんですよ。

古き者がなぜクトウグアを研究していたかは最後まで分かりませんでした。……良いものを残してくれたものです。

「九郎さん達はどこへ行ったのでしょうか」

魔力の反応を辿ると、九郎さん達が随分離れていることが判明しました。懸命な判断です。僕が、固有結界なしであんな戦い方したら、周りを巻き込みながらになりますからね。

特にカトウグアの誓約解除は、周りの魔力を汚染させてしまうため………純粹に空気が澱んでしまいます。

最初の頃はこんなデウス・マキナの装甲吹き飛ばす威力でもなく、普通に破壊ロボットを撃墜できるぐらいだったのですが（誓約解除は含まれない）最近気になってカトウグアのコアを調べましたところ………コアが暴走していたことに気がつきました。だからといって、なにもしませんが………。

「到着？」

九郎さん達の魔力………もといアルさんの魔力を辿っていったところ、凄まじい金持ちが住んでいそうな豪邸に行き着きました。

「九郎さんの自宅は訪ねたことありませんでしたが………まさかこんな豪邸に住んでいるとは、人は見掛けによろませんね。………冗談冗談。霸道財閥の屋敷というのはデモンベインの格納庫繋がりで分かっていますよ」

ああ、寂しい。誰も居ないから、独り言いっているようにしか見え

ませんよね。ただの危ない人じゃないですか。ああ、切実に喋る相手が欲しいです。

「これ以上いても不審者として捕まりそうですから、いったん戻りますか」

僕は懐を探り、瓶を取り出しました。

「それにあまり暇じゃありませんね。せつかく手に入ったんですからじっくりデウス・マキナの構成要素を調べたいですね」

念願のデウス・マキナを手に入れた。（あくまで一部の一部）

固有結界という名の工房に引きこもって解析することにしましょう。

「その間、アーカムシティの平和は九郎さんに任せます。あの人なら大丈夫でしょ……どんな苦難にも立ち向かえるそんな正義の味方ですから」

それに、僕がいなくなっても長い間ブラックロτζと戦ってきたこの街なら平気だと思うんですけど……凄く心配だ。

「使い魔でも造って九郎さん達でも護衛させるか？」

いや、やっぱやめておきましょう。変に警戒されるかもしれませんし、それにそれは彼らを信用していいことになりません。

「固有結界の中の時間をこの世界とずらせばいいのでは？」

作業から数分経過。

どうにか固有結界の時間をこの世界とずらす術式を完成。そして、副作用（？）のせいかわ僕は完全な不老の体質になってしまっていた。前までは成長が遅い程度ですんでいたんですけど……これで人外に一本前進ですね。嬉しくなんてありません。

「では取り掛かりましょうか」

「ふう……朝陽が眩しい……」

ゲームを完徹したのと同じにぐらい身体がだるい。中にずっと籠っていて、朝陽を浴びていなかったせいか妙に朝陽が眩しかった。

それとデウス・マキナの構成物質を解析をしたところ中身は純粹な魔術だけではなく、もっと複雑な式も組み込まれていました。……それも人間じゃ理解出来ないようなヤバ気なやつです。でも、僕には理解出来ず。

「数式だと……そんな概念邪神にはないはずでしょ」

中身を確かめてみると、あったのは超が付くほどの複雑な数式だった。

「なるほど……彼等の置き土産の産物だった訳か『デウス・マキナ』は」

魔導書はあくまで省略化と和訳を目的とした存在。理解出来ないなら理解出来るように解釈するしか人は神を知る術がなかった。ただそれだけの話し。

「まあそれはともかく、今はそんなこと気にしている必要はない訳
です」

それよりも、衣食住の確保の方が重要です。

「まあがんばりますか」

結果出来上がったデウス・マキナは制御できないと空間が歪むよう
な出来損ないになってしまった。

なお、カイトは魔術の制御が苦手なためデウス・マキナを固有結界
の外で使えるかどうかは怪しいところ。

S i d e アル＝アジフ

気に食わぬが実に気に食わぬが、カイトの言われた通りシスターら
を安全な所まで運んでやった。今の我ではマスターテリオンには到
底敵わないことは分かっているが、悔しい！！ 魔を断つ刃の我が
他人任せにして、ここのうのう安全な場所にいること事態が間違い
なのだ！ 魔を断てぬ刃に明日などない。

「大十字さんここは保育所じゃありませんよ！！」

「単純かつ複雑な事情がありました……」

「すみません家の家族が迷惑をかけます」

「すげ〜金持ちだ!!」

「うわあ〜！ 床が光ってるよ床が！」

「（オロオロオロ）」

孤児院では見られないような風景に子供たちは興奮状態のようであつちこつちと走り回っている。

「ではその単純かつ複雑な事情を教えてくださいなのですが。もし、私が納得できないような説明でしたら分かっておりますかね…
…?」

たかが小娘風情がなにをいっておるのやら……。

「マスターテリオンが攻めてきたのにg……一時退却してきました」

我が九郎を睨み付け、多少脅したので言葉のあやを訂正することが出来た。

「はあ〜。ではこのこと逃げてきたと解釈してよろしいのでしょうか……?」

瑠璃は深くため息をはき、腕を組みなおした。

「小娘！ さっきから言わせておけば…!」

瑠璃へとつつかかっていくが途中で九郎が腕で制した。

「だって事実じゃありませんか？」

「なにも知らぬからそんなことが言えるのだ!!」

「はいはい分かっていますよ。彼が必死にがんばっているのでしょう……。今は彼の無事を祈るだけです」

「つつ!!」

「アルどこに行きやがる!!」

「付いてくるな! この三流探偵魔術师风情が!!」

第9話

どうもカイトニアハードです。

空を眺めると雲が流れていくのがよく分かります。自然とは素晴らしいと実感する今日一日です。

まあ、軽く現実から目を背けているのもあります。

衣食住などは人にとって不可欠なもので、衣は着る物つまり服のことを言います。これがなかったら原始人以下なのではとおもってしまいます。どこかの曲の歌詞に、葉っぱ一枚有ればいい 的な歌詞がありました。それを公衆の目の前でやれば確実に御用となることでしょう。

僕は特に問題はなくマントを羽織ってその下に色々着てるから問題なし。

食は食べたり飲んだりごく普通ですね。まあ、この三つの中では一番重要だし、なかったら生き物としては生きていけないレベルです。

実はこの前の固有結界の時間設定作業の副作用で、とても燃費が良くなりました。具体的に言うとカロリーメイト一本で一ヶ月は生きていけるぐらいには……。

そして住。

住宅ですね。これがなかったら家なき子になってしまいます。きちんとしたものでなくていいならホームレスのダンボールハウスや祠？ もありだと思います。

僕はある意味マイハウス（固有結界）を持っていますが、なんか違うような気がします。僕だってもっと快適な空間で過ごしたいと思うし、人を呼べないような人外魔境の地はちょっと勘弁したいです。

「どこか優秀な物件ありませんかね？」

草むらに寝っころながら空を眺めていても、空は綺麗だなぁ〜としか考えつかないです。

何時かは空を自由に翔けてみたいと心底思う。

デウスマキナもそうだけど僕は、どうも魔術の制御が普通の魔術師と違って疎く中々向上しない。『跳ぶ』ことは出来ても『飛ぶ』ことが出来ないという表現の方が正しいのでしょうか。

「このまま寝ていても仕方ないので、ブラブラと街を回ろうと思います」

破壊ロボにより致命傷にはならないものの、一部被害を受けた建物の修繕と瓦礫の後始末、デモンベインにより撃退された破壊ロボの破片はごく僅かだが貴重な資源となり有効活用されていく、霸道財閥の力なのかマスコミや記者などという情報屋はデモンベインについては調べようとせず、一部の会社では規制にかけられているほどだ。それまでに霸道財閥を恐れ異怖の対象にしているということである。霸道財閥に嫌われ、最悪機嫌を損なえば会社に首を切られること確定、これはまだ温い方で、社会的抹殺をされて裏にも表にも出てこれなくされてしまう。霸道財閥を深く調べに行った者は誰一人と還つてこなかったらしい。今回、デモンベインの放ったレムリア・インパクトにより一部の地域が侵入禁止地域に指定されてしまい、陥没した大地は埋め立てしているらしい。

そんなアーカムシティの街に今物凄く怪しい格好をした少年がブラブラと歩き回っている。

見ない顔であるし、それに、もの凄く怪しい。

現在のアーカムシティはなにかとピリピリしているため、外部から来た者に大して神経質になっている。そんな怪しい格好（黒のロングマント）をしている者を警察官が見逃す筈なかった。

「ちょっと！ その君！」

呼び止められているのに気が付いていないのか、平然と歩く速度を変えず歩いている。

「君だよ君！！ そのマントを羽織っているその君」

黒マントの少年は反応もしめさなかった。通告したにも関わらず、止まろうとしない少年に警察官はイラだち、つつい強めに肩を掴んでしまった。

スブ……ッ！　じゅ！……じゅ！……じゅ！……。

触れた瞬間、警察官は背筋が凍る感覚。嫌悪感や吐き気。まるで異物が身体に無理矢理入ってきたかのような感覚に捕われるが、その違和感はずぐに消えた。

どこからか汁を啜るような……いやもつと生々しく固体が液体になり掻き乱されるような音を出しているのは、警察官が黒マントの少年に触れた肩からだった。

少年は、特にこれといって変わった様子はなく、警察は首を振り、これは幻覚類のものだと考えた。出来るだけ気にしないようにしようとしていたが、これは体の異常の一種かもしれないので一度は健康診断を受けたほうがいいかもしれないと考えていた。

「はい??　僕のことですか?」

少年は警察官と係わり合いにならないようになるべく避けているため、呼び止められて理由に心辺りがなかった。

少年は、もしかして市民アンケートなのかなあ、と思っていたりする。

「ちょっと暑まで同行願おうか……?」

Side カイト

ただ街を歩いていただけなのに警察官に連行されています。

実は人生初なので、少しワクワクしていたりしています。

それにしても……警察官に呼び止められるのに心当たりがありません。

「名前と住所と電話番号と保護者名をお願いします」

「え？ ああ……名前ですか……名前はカイト「アハード」といいます。住所は旅をして土地を転々としてるので特に決まってません。電話番号も通信機器が無いものでして番号自体持ち合わせていません。あと、保護者ですか……火葬しました……名前は……教えないと駄目ですか？」

「いやいいよ、君が壮絶な人生送ってること分かったから！？ じゃ、君は旅先が偶然アークムシティだったってことかい？」

「偶然……？ うん。偶然なのかな？ 深い眠りより目覚めし機神。マスターテリオ七頭の下より集結されし、逆十字の使者。まるで物語りの主人公のような……ただひたすら真っ直ぐで……でも、駄目人間のカタゴリに属する探偵。死霊により伝えられし秘法。劣等感に押し潰されそうになるも立ち直りその鋼鉄の心を得た少女。……僕に……立ち位置なんて……異常による異常以上の異常者……。まるで、アニメや漫画やゲームなんかの世界に居るみたいです」

「なんか……すまない。失礼で言うが、君は一度精神科に行つてきてみっちり精密検査を受けた方がいい。母を亡くしてしまった君は精神が病んでしまつてゐるんだ……。身寄りがなく、一人で生きてきたんだ。誰も責めたりなんて出来ないさ……」

なんか優しい言葉をかけられました。僕を哀れとでも思つてゐるのでしょうか？ 身寄りのない人間ならいっぱいいますし、旅に出る人も少なからずいると僕は知つてゐます。だから僕はこの程度の人を苦行とは思つていません。

僕は人を殺すのが嫌いだ。

でも……アイツだけは特別だ……。

会つたら次はない……。

殺して殺して殺し続けて……その最果てになにを見出した……道化師よ……。

「じゃ、気をつけるよ！ ここんとこ物騒な事件ばかり起きてるから深夜徘徊は出来るだけするな！」

けっこう早い段階で終わりました。僕に事情聴取しても無駄と分かったからでしょうか？ それはどうあれ早い段階で終わったって拘束される時間が短かったのは嬉しいのです。ここは純粹に喜んでおきます。

立ち去ろうと僕は椅子を立ち、帰ろうとしますがここでふと思い出しました。良い物件を 探している

「すみません」

「ん？ なんだい？ 聞きたいことがあるば、オレの知っている限りのことは教えてあげられるぞ？」

「なら……良い物件を紹介してください」

そう僕が言うと、警察官はうつすらと笑いながら後ろにある棚の中から一枚の地図を取り出してくれました。

「たしかここら辺に、今じゃ使われていない空き家があった筈だが……ここだな」

良い物件を紹介欲しいと頼んだのに、何故空き家になるのでしょうか？ しかし、これも警察官の親切心から来る行為なので無下にはできません。

地図の場所を見ると、そこはミスカトニック大学から徒歩数歩の位置にある場所で、いかにも曰く付きでありそんな気配がプンプンします。

「ここですか。一度見に行ってみますね。どうもありがとうございます。親切な警察官さん」

僕は最後に警察官の方をしっかりと向き、お辞儀をしました。

「少年よがんばれ」

S i d e ア ル

一人の少女が華奢みやげな体からとは思えないほどの脚力で脇目もふらず疾走している。その翡翠色をした瞳は濁り、曇り、本来あるはずの輝きを失っていた。

（情けない情けない情けない情けない！！　凶星を突かれ感情的になるなど……しまいには九郎に八つ当たり……小娘の純粹にまで何かと向き合うその姿に我はイラだった。そんな感情をもつてしまう自分をもっと情けない！！）

「アル！！」

あの後九郎は飛び出していったアルの後を追いつ、呼び止めようと走りながらも大声を出す。アルは一向に止まる気配がない。手足はいい加減疲労し始め、そろそろ限界である。九郎はなぜこうなったのか頭を抱えていた。とりあえずはアルの後を追って捕まえる。その後のことは何一つ考えていなかった。しかし、九郎とアルと距離は縮まることはなく、むしろ離されてしまっているのが現状である。

「！！」

ふと、突如アルは走るのをやめ、その場で急停止した。膨れ上がった二つの魔力が突如消失し、まるでどこかへ消えたかのような

だ。

(彼奴め一体何者なのだ……)

アルはそんな疑問と、本当に信頼してよい者なのか再度考えていた。素手でデウスマキナを破壊する少年、あまりにも異常でありこの世界の基準から見ると「規格外」カイトがヒトであるか人外であるかのすら定かではない。そんな彼を信頼して大丈夫なのか？ 表面上善人を装っているがその中身は違いかもわからない。我々を利用しようとして信頼を得ているだけかもしれない。次々と疑念が浮かび上がっていく。

「ぜえ…ぜえ…。ようやく止まりやがったな、こんちくしょう!!」

ゼエゼエと荒息を立てながら、九郎はそう叫んだ。

「なんだ汝、ここまで追っかけて来よったのか……九郎はよほどのストーリーカーの常習者かロリコンか？」

アルの言葉に否定しようと九郎は考えたが、疲れていて言葉を言うのも面倒だ。

「だあ〜〜!! もーいいよ!! 帰えんぞ!!」

「汝! 引つ張るな!!」

それに、面と向かって何を言えればいいのかも分からない。こんな煩い魔導書だけど、九郎にとってはとても大事な『家族』なのだから。

「おかえりー!! アルと九郎!!」

「（オロオロオロ）」

「お帰りなさいアルちゃんと九郎ちゃん」

「ただいま」

そこにはこめかみに笑顔のまま青筋を浮かべた瑠璃がいた。その瑠璃は何もしゃべらず沈黙している。瑠璃の隣にいるウィンフィールドは平然と立っており、顔一つ変えないのは執事の役柄だと思う。

「何をそんなに怒ってイラッシャルンデショウカ、ルリオジョウサマ……？」

汗がだらだらとまるで滝のように流れ、急に胃が痛み始めた。

こんなんで先、九郎は生きていけるのだろうか？

（やべエー。カンカンだよ）

第9話（後書き）

質が悪くなってきた気がします。

第10話

時間帯は深夜。

そこは暗闇。電灯も付いてもいなく一筋の光すら射さらぬ裏通りに疾走し続け人の姿がぼんやりだが見える。

視線の先にある場所には月の光が差し込んでおり、少しづつだが人の姿が鮮明に見えてくる。

そこには白髪を束ねたポニーテールに深紅の瞳、まるで人の血を連想させる程に赤々しく、見入ってしまったくらい美しい少女である。この世の者とは思えない不可思議な印象がある。年の頃は、まだ十代前半だろう。女性としての成熟度から言うと発展途上である。ただ丸みを帯びた体には女性特有の柔らかさがあった。華奢な肢体からは想像出来ないような速度で夜道を爆走している。

一歩踏み込む度に足からは魔力が放出され、爆発的な推進力^{すいしん}を得ているようだ。

表情は無表情であるため、疲れた様子を感じられない。

ババババババツッ！！

後方から発砲音聞こえる。静寂な夜アーカムシティに鳴り響く。

断続的に聞こえる発砲音。少ない弾数であるが銃弾は数発少女に向かい迫りくる。

無防備ともいえる背後。当たれば華奢な身体に無数の穴が空き鮮血が宙を舞うことだろう。致命傷になりえる攻撃であるがそれでも少女は避けようと振り返ろうともしない。距離が次第に0（ゼロ）に近づく。

突如少女は一步強く跳脚。刹那、少女は宙を舞い背後が白銀に輝く。それはまるで蛹おきなから蝶しじへと変身する瞬間。美しい変貌へんぼうである。白銀に輝く翼が左右に対となり、身体を覆う程に大きく広げられた翼は少女を護るため銃弾を全て阻んだ。

倒しても倒しても沸いて来る黒服装束に少女はいい加減うんざりしているのか溜息をついた。

（ううっ……魔力不足のため翼は長時間維持できないし、空に逃げる手段は使えない。ど、どうしよう！）

最初は何やらこの街に怪しい気配を感じ来たのだ。夜うるついでいただけなのに追われる目に合うのは予想外であった。

前方を魔力により視界を強化。後ろから追ってくる奴らと同じ格好をした者達が待機していた。

（まさかの待ち伏せ！？ どちらかというところちの方に誘導されていたみたい。今日はずくづく運が悪いみたいだよお）

『翼』の維持に魔力を奪われ、魔力により速度を得ていた少女はそつちに魔力を割り振れなくなってきたのか次第に速度を落とすていく。

（捕まるのも時間の問題かな？ ううゝ捕まりたくないよお）

自分を追い掛けているということは魔術が関係しているのは明白だ。捕まったら最後実験に使われて死ぬだけで済むならまだいいが、『私』は『女』だ。どうなるかは想像しなくても分かる。

後ろに展開されている翼は少女からの魔力供給が足りなくなっているのか消えかかっている。

(しくしく。最後ぐらいは潔く散るしかないかな)

そう脳内で考えていた。

決断したのなら話は早い。刹那、少女の背後が黒く輝く。暗闇よりも深く、暗闇よりも暗き存在が白の翼の付け根から生まれる。

それは『翼』だ。漆黒の翼を携え、少女は夜空を駆ける。

四つの翼はまるで自己主張するかのように強く輝く。

『オーバーロード』

少女は現在自らの限界を超えるため、己の存在を糧に魔力へと変換している。少しづつだが着実に魔力を集めている。

人が見れば思うだろう『天使?』と。

少女を起点に魔力が爆発的に増加している。一般人も肌身で感じられる程の魔力濃度であり、魔術師には有害になりえるものである。

コレを放てば街は半壊する程度で済むが、半径100mの幻想生物は死滅するであろう。これは魔術師も例外ではない。

少女は少女なり考えた結果であり、より効率に対象のみを狙える方法でもあった。

本来なら普通に使えるものであるが、現在魔力不足のため使用不可能である。己を犠牲にする必要があるが、『死』よりはましな『結果』を得られると冷静に判断し決断を下した。

己の使命を未だ達成出来ていないが、仕方ないと諦めた。

空を制止中でも発砲音は鳴り止まない。翼は少女の害悪がいあくとなる存在を通そうとはしなかった。翼に阻まれた銃弾は勢いを無くしたのか下へと落ちていく、下を見れば落ちていった弾がそこらかしこに散らばっていることだろう。

過去を思い出しても大した思い出もなかった。

(平べったい人生だったな……最後ぐらい綺麗に着飾りたかったな女の子として)

更に天高く舞い上がり制止。黒白の翼が少女を包み込んでいく、それに比例して翼は白銀色に漆黒色に輝きを増していく。翼から光の粒子と闇の粒子が吹き荒れた。光の粒子は地上に向かって静かに落ちていく。闇の粒子は天に向かい空へ昇るのぼる。

幻想的な光景であろう……。なんにも知らなければだが……。

少女を基軸に噴出した粒子は着実に世界を構成し始めていく。

少女のやろうとしたことによつやく気が付いたのか、短パンの少年が少女に向かい魔力を内包する鎌鼬カマイタチを放つ。放たれた鎌鼬カマイタチは黒服装束の格好をした人達を巻き込みながらも少女向かつて突き進む。粉塵を撒き散らしながらもその力は衰えず、むしろ姿形からは威圧を感じる。余波で発生した突風すらも周りを吹き飛ばし猛威を振るっている。周りを巻き込みなが肥大していく姿はまさに『災害』人間が恐れ、崇め、神にすら昇華したという猛威そのものである。だが鎌鼬カマイタチは光の粒子に触れた瞬間魔力は霧散し、ただの鎌鼬カマイタチになつてしまった。自然現象まで墮ちてしまった鎌鼬カマイタチは少女にたどり着くこともなく消滅した。

だが、黒装束の人達は空へ高く舞い上がり星となつた。

「ファッククツツッ！！ 自称天使の餓鬼がざけんじゃねえよ！！」

周りにはこの二人しか存在しない。

短パンの少年が怒声を少女に浴びせるが少女の表情に変化はなく、

ただ淡々に作業をこなしていくだけだった。

宇宙そらに散りばめられた輝く星々（ほしほし）。雲などなく、清々しいまでに写し出される月夜の光。暗闇の世を照らし、世界に光を与え続けるその存在。

空は『黒』

地上は『白』

宇宙は『闇』

大地は『光』

境界線は等しく『平等』

(楽しくもなかった…つまらなくもなかった…なんて私は思わない。だってこんな生涯に私はなにも感じなかったから。最後にただ一つ願うことがあるとすれば…白馬の王子様に一度はあってみたかったなあ…なんて)

少女は夜空に光り輝く月を見て思う。私にもあんな『光』が欲しかった。

「えっ！？ なんですかこの状況は！」

そちらを向くと何やら怪しい格好をした少年がいた。

Side カイト

道に迷い、深夜になってしまいました。

そして、まさかの超展開な状況に居合わせてしまったようです。

空には異能滅殺！！ を形にしたかのような存在が光り輝いています。姿形は人型をどうにか保っているようですが……ヒリヒリと感じさせる異物殺しの光に触れて解析したところ、やはりというか予想通り自身を喰わせて発生させていることが分かりました。

このままでは確実に死を迎える……。人でいう内臓を喰われているようなものだ。何故こんな最悪な状況にまで陥ってしまったのでしょうか……？

ビューン……！！

そよ風？　と思ひ音の鳴った方を向けば、ベーゴマを持った短パンな少年が鬼の形相で僕を睨み付けてきました。

僕なにか粗相をしましたか？　と聞き返したかったが、どうやら少年は自信ある魔術を防がれて腹を立てているようです。突然ベーゴマを投げ付けられたのでキャッチして手元に納め二度と使えないようにしました。破壊しないのは破壊する理由が特に見つからなかったからです。キャッチしたベーゴマからは若干ながらハスターの力を感じたので、解析したところ【セラエノ断書】でした。

「こおおのおおお！　余裕ブっこいてんじゃねえよおお！　この糞がアアアッ！」

少年が持つてる【セラエノ断書】は魔導書の中でも上位ランクであり、常人ならば触れるだけでも発狂してしまう『書』であるのです。そんな魔導書を持ち、ハスターの力を使役するとなると…少なくとも普通じゃないです。

「暴力はよくないです！　まずは話し合いましょう」

状況から推測するに無理とは分かかっていても戦わなくて済むならそちらの方が良いので、話し合いが出来るならしたいと思います。

「舐めた口利いてんじゃねえよこの平和主義の糞がアアアッ！！
死ねえええエエエッ！！」

うわおっ！！　少年がけん玉を片手に容赦なく突っ込んできました。身体全体を風で纏っているのか、周りには膜がうっすらとだが浮か

んで見えます。

……叩けば簡単に壊せると思います。そんなことをしても無駄だとは分かっているのです……一度足を止めてもらいます。

「はあっツ!!? 僕のけん玉を片手で受け止めるだど!! ……腹立つ……苛立つ……ムカつくんだよテメェ!! 原形留められないようミンチにしてやるよおおオツツ!!」

少年を中心に風が吹き荒れた。粉塵を撒き散らし、砂塵を巻き上げ宙を舞う。魔力が爆発的に上がっていくのを感じる。

「ロードビヤー……!!?」

「迷惑だ。とりあえず寝ていてください」

いかにもデウスマキナを召喚しそうな雰囲気だったものですから、反射的に殴ってしまいました。

別にデウスマキナと戦っても負ける気なんてありませんが、デウスマキナなんて戦略級の怪物を召喚させたら街の被害がとんでもないことになります。なので、呼び出させる前に気絶させるのが吉です。

「お休みなさい」

僕はそれだけ言うと少年をベンチに寝かせておきました。風邪を引かなければ良いのですが……『風』だけに。

「やっ……」

僕は頭上に浮かぶナニカを見上げています。

「どうしましょ……」

ナニカから噴出させている物『光の粒子』と『闇の粒子』それぞれ上下に別れているのが視認できます。

嫌な予感がするのでこのまま放っておく訳にはいきません。となると『殴る』か『説得』かの二択になります。僕としては話し合いで解決したいので殴るのは出来るだけ避けたいです。

「恐い人達はもう僕がもう追っ払ったから大丈夫ですよ」

優しい声色で空に浮いているナニカに僕は笑顔で言った。

まあ、追っ払ったというよりも、気絶させてベンチで寝かせているのですが……。

「本当ですかあ？」

ナニカからゆつたりとした声が聞こえる。

「はい！」

「うう……。でも魔術師はみんな私を見ると襲い掛かってくるんだよ。お。貴方もそんな奴らと同じなんですよ？」

「そんなことありませんよ。基本的に僕は平和主義ですから相手にちよつかいをかけられるか、余程の私情が入らない限り物騒なことには首を突っ込みません。それに、貴女は追い掛けられてきた被害者ですしむしろ同情します。ですから安心して降りてきてください」

「……分かったよお。裏切っちゃ嫌だからね」

説得が効いたのかナニカは地面に降り立ちました。

やがて僕は少女と目が合いました。深紅の瞳に光沢を放つ程に輝く白髪……プラチナブランドと言うやつですかね？ 髪はポニーテールで縛られており可愛いと思います。十代前半ぐらいなのか凹凸がありません。しかし、少女の造形は何故か魅入るってしまい程に美しいと僕主観でありますがそう感じます。

「うっ……」

降り立った次の瞬間少女は地面に向かって倒れ込みます。地面に激突する前にスライディングして割り込み、なんとか怪我を負わずにすみしました。

「すう……すう……」

疲れたのでしょうか少女は眠ってしまいました。

寝顔はどことなく幸せそうであり、満足げでありました。

間近で改めて見てみると随分と可愛いらしい方です。

このまま此処で寝かせておくと風邪を引いてしまうので、どこか暖かいところに移動したいと思うのですが……。

元々僕は道に迷ってしまいこの場所に来てしまったんですね。

この場所からは離れたいのでとりあえず少女をおぶっておきましょう。

寝息で規則的に胸が上下するのが服を通しても分かります。

不意に笑みが零こぼれてしまっています。幸せなそんな寝顔。少女の実質な生活もこのような幸福であって欲しいと思ってしまっています。でも難しい……無理なんだとは薄々でありますが理解しています。魔術師に追われているからには魔術に手を出し真つ当な生活を送っていないか。または人なざる存在……人外な存在であるんでしょう。

そういえばまだ名前を聞いていませんでした。起きたら聞きいてみることにしましょう。

「『ご都合主義なんでしょうか……目的地についてしまいました』」

目的地に着いたのはいいのですが、このまま入つたら不法侵入で、また警察官の方にお世話になることでしょう。

しかし、偉い人は言いました。『バレなきゃ犯罪じゃない』と。バレなければなにやってもいいとは思いませんが……ってかやつちゃいけません。しかし、現状が現状ですし、仏の顔は三度までといいます。ならいいですよね……？

一番良いのは誰かに泊めて貰うことなのですが、今僕が背負ってい

る少女の問題もありますし、あまり他人に迷惑はかけたくありません。魔術関連の事情を知っている九郎さんに頼むのもありません。が、これ以上九郎さんにストレスを与えるのは芳しくありません。ただでさえブラックロツジなんて組織の相手をして心体共々擦り減らしているのですから。

それに少女の正体についてはやる気ならアザトース的な能力で調べられますが、寝ている娘相手に無断でやるのはさすがに気が引けます。

そんな物騒なことしないで、少女が起きてから質問すればいいのですから。焦らず地道にやっつけていこうと思います。

さて……冷えない内に入りましょうか。

ドアには鍵が掛かっていなかったのか、中にすんなり入ることが出来ました。ここまで安易に入れるとなると怪しい気がします。なんか怖いような気がします。が勇気を出して一歩足を踏み入れて中に入りました。瞬間耐え難い異臭が僕の鼻腔を刺激します。

「臭いです……臭くなります」

「う……っ」

強烈な異臭を感じ取ったのか背負っている少女が苦悶の表情をさせながら唸り声をあげました。

僕はこの部屋の異臭を脱臭するため窓を開け換気しました。すると、中に籠こもっていた空気が外に出ていき少しはましになりました。しかし、壁、床、天井。材質が木のせいかな臭いが染み付いており、黒ず

んでいます。

人の住めるような場所ではないと普通は考えるだろう。しかし、カイトは転生前も今も掃除が好きで、趣味特技が掃除であるというなれんというか……地味な人であった。

転生前は一人寂しく教室で頑張つて掃除をしていた。他人に押し付けられた作業も嫌な顔せずがんばった。傍から見れば優等生にも見えたらしく先生方には褒められていたが、クラスの人に褒められることはなかった。なんのために掃除を自主的にやりはじめたのかは忘れてしまった。

転生後は母親のつばらで掃除しないのを見て、自分がかんばらなければと思い、部屋の隅々まで掃除したら母親に褒められ嬉しかった。ガンブラ製作は転生前でもやっていたが、おこぼれパーツで作れるほど技術力は持っていなかった。

これはこの体が内包する才能の一つなのだろう。母親の仕事が開発関係である。その子供に才能がないわけがないということなのだろう。褒められるのは好きだったし、ハグされるのも好きだった。

転生前の影響が心が少し成熟していて母親のスキンシップが恥ずかしくなかったが同時に嬉しかった。他人に必要とされる……これだけでカイトの心は満たされていた。そして、心の底から母親を親愛している。この気持ちに偽りはなかった。

カイトは周りを見渡し、何か決心したのか言葉を発した。

「1時間ぐらい掃除すれば綺麗になると思いますし、野宿よりはま

しでしょ」

確かに掃除をすれば綺麗になるだろう……。だがそれには途方もない時間が掛かるはずである。床などが黒ずみ、材質が木々であるとか所々が傷んでおり体重をかければ床が抜ける状態である。

掃除をして周りを綺麗にしても、ガタが近いこの屋敷には限界がある。

全くと言っていいほどこの屋敷は生活感を感じない。まるで最初から誰も居なかったようだ。

不思議とっていいほどにクモの巣が見当たらない。偏見かもしれないが、古びた屋敷にはクモの巣があるという定番がカイトの頭の中で一般常識化していた。

アニメ、漫画、ゲームの影響であり、カイトの廃墟のイメージである。

掃除に取り掛かろうとするカイトだが、困ったことに掃除用具が見当たらない。

当たり前だ、そんな気の利いた物など置いてあるはずがない。もしあったとしたら、それは遠回しに掃除をよろしくお願いしますと頼んでいるようなものだ。

カイトは目をつぶり考えはじめた。

「確か……この近くに九郎さんのお宅があったはず。少し迷惑になるかも知れないけど、今日この子だけでも泊めてもらえないものではないでしょうか……でも、時間から考えて起こしたら怒りそうなので、やっぱりこの案は却下です」

暗い表情をするカイト。

「うう〜ここはどこお？ それにしてもよく眠ったよ」

背中に負ぶさっていた少女が目を覚ましたようだ。起きたばかりでまだ夢うつつなのか、ぼんやりとしている。目元を擦り、欠伸あくびをする仕草は可愛いらしく、ある人種のマニアには唾液ものであるだろう。

「起きましたか。あの後貴女は気絶してしまつたみたいで、グツスリとお休みになりました。風邪を引いてはと思い、すみませんが勝手に運ばせてもらいました。別に取って喰おうというわけではありませんから安心してください」

「ありがとう。それにしてもぬくぬく暖かいようなあ……臭いけどポカポカ暖かいようなあ」

口元を緩ませてカイトのマントに顔を埋めた。

決してカイトの体臭が臭う訳ではありません。

頭の中がまだ起きてないのか、自分がカイトにおんぶされていることに気付いていないようだ。

「立てますか？」

立てますか？ カイトの放った言葉がやけに響く。顔を何か暖かい物に埋めながら少女は少しづつ頭の中を整理していく。

現状把握をしようと思うよ。

時間及び日付は保留として。

魔術師から追っかけられてヘトヘトに疲れたかな？

色々と情報不足なためまだ推測の域を出ないので確定とはならないから保留かな。

アーカムシティに侵入した際に使用した経路及び、全体地形把握から推測するにここはアーカムシティなのはほぼ確定であるから……。

なりよりも魔術師との戦闘。私ははどうした？

限界を超えた影響により気絶したのは、ぼんやりとだけ覚えてる。

そして、この少年からの言語より私は運ばれた。

結論……抱っこか、おんぶの確率が大きい。

「はえ？ あううう〜！」

気付いた時には心臓がバクバクと煩うるかった。

きつとこの少年にも聞こえていると思う。そう思うとそれだけで私の顔が熱くなつていくのを感じる。

鏡で自分の顔を見れば顔がトマトの様に真っ赤になっているはず。

こうやっておんぶしてもらったのは初めてだし、人の体温を身近に感じるの久しぶりかもしれない。

迷惑になるかも知れないと考え、どうにか暴れないように自分を制したが、それからまるで体が石になったよう固まってしまい動けない状態になってしまっている。

「とりあえず下ろしますね」

「あ、はい!!」

私の足の届く位置まで少年は腰を屈める。

地面に足が着くが、足に力が入らないのか足元がおぼつかなかった。そのまま倒れてしまいそうなところを少年は抱きかかえてくれた。

「やっぱりまだ調子が悪いみたいです。椅子なんかがあればいいのですが……残念ながらそれらしき物は全部風化して使いませんね。かといって地面に座らせると汚れてしまいます。うむむ……どうしたものでしょうか……」

か、顔が近いよ///

「とりあえず自己紹介しませんか？ 僕の名前はカイト＝アハードつていいいます。君は？」

ええ///!!? こんな体勢から自己紹介/// 恥ずかしい
恥ずかしいよお///

「アレレ？ 返事がないな。ちょっと強引過ぎましたか？ これは

申し訳ございません。無理に聞こうとしたわけじゃないんですよ。」

申し訳なさそうにする顔に罪悪感を感じるが、それよりもこの体勢を早くどうにかして欲しい！……いや別に嫌ってわけじゃないんだけどね／＼／＼ 安心するし、なんだか温かい力を感じる。このまま寝てしまいそうになるほどこの人の近くは落ち着ける。

足りないものが満たされていくそんな感じがする。

「わ、私の名前は……」

第10話（後書き）

意味があるのか分からないけどアンケート!!（見ているひとすくないんだから意味無いんじゃない）

少女の正体は!!

? 沙耶の唄の沙耶のEND後の世界から来たナニカ

? ムーンチャイルドの被検体

? 『魔』を完璧に滅ぼす存在

? 詳細不明

どれがいいでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0238o/>

行き着いた先はデモンベインの世界だった.....

2011年8月23日23時16分発行